

第1章

社会の多元化と多層化

——1990年以後のエスニシティと社会階層——

沼崎 一郎

はじめに

本章の目的は、過去20年間における台湾社会の「多元化」と「多層化」の様相を概観し、後続の諸章が詳しく検討する諸問題の社会的背景を明らかにすることである。あわせて、過去20年間の変化をどう解釈すべきかという点に関し、筆者の仮説を提示したい。本章では、多元化という語を、単に社会的区分の増大という意味だけでなく、社会的分化の複雑化という意味にも用いる。社会構成の多次元化といってもよい。一方、多層化とは、階層構成の細分化と重層化を指す。

序章が指摘するように、1990年代以降の大きな政治経済の変化にあいまって、台湾社会もまた大きく変容してきた。本章では、とくに「族群」すなわちエスニシティと、社会階層とに焦点を合わせ、1990年代から2000年代にかけての変化を考察する。本章の主張は、1990年代までは「二元的」かつ「二層的」であった台湾社会のエスニシティと社会階層は、1990年代以降急速に多元化・多層化し、台湾社会の複雑性が増すとともに、その統合の困難さも強まっているのではないかというものである。さらに、本章では、現代台湾社会においては、エスニシティと社会階層の「個人化」と「国際化」が始まっているのではないかという仮説を提起する。

かつて筆者は、政治的民主化と経済発展の進展にもなつて、社会の「台湾化」と「中流化」が進むと展望していた（沼崎 [1998, 2002], Numazaki [1999]）。それは、蒋介石・蔣経国政権下の社会を特徴づけた「省籍矛盾」¹⁾が、「外省人」・「本省人」双方のバイリンガル化や省籍を超えた通婚の増加によってしだいに解消され、また「原住民」の政治的承認と経済的向上によって漢人と非漢人との差別と格差も緩和され、さまざまな社会的・文化的差異を抱えながらも、共通の「新しい台湾意識」が醸成されて、「ひとつの台湾社会」が形成されるのではないかという予想であった。経済的な格差も、安定的な経済成長の下で、縮小傾向が続くものと予想していた。

しかしながら、とくに2000年代の台湾社会の展開は、かつての筆者の予想に反し、序章で指摘するような政治と経済の激動によって、台湾社会内の差異化が増大している可能性をみせている。そこで、本章では、近年の台湾および日本の主要研究文献を渉獵しつつ、この20年間の台湾社会の変化に出現した、遠心力となりうる「新しい差異」を指摘したい。

本章の構成は以下のとおりである。第1節においては、1990年以前の台湾社会の二元的・二層的構造を振り返って、変化の基点を確認する。続く第2節と第3節では、それぞれエスニシティと社会階層の多元化および多層化の様相を具体的に描写する。「おわりに」では、社会の多元化と多層化が、遠心力あるいは求心力として働きうるか否か、その可能性を検討してみたい。

第1節 1990年以前の二元的・二層的構造

1. 二元的・二層的構造の成立

日本統治期、蒋介石・蔣経国統治期にかけて、台湾においては、「外来者」対「先住者」という二元的対立と、「支配層」対「被支配層」という二層的構造が重なる社会が形成された（Ahern and Gates eds. [1981], Copper [1996],

沼崎 [1998])。

(1) 日本統治期

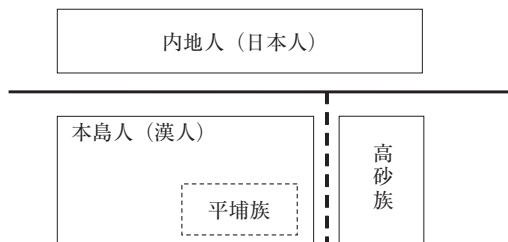
日本統治時代には、外来者である日本人が、植民者として支配層を成し、日本人に比して先住者であった漢人移民とその子孫および本来の先住者であるオーストロネシア語族系諸民族とが被支配層を成した。

漢人とオーストロネシア語族系諸民族とは、日本の領台以前から、それぞれ外来者・先住者として二元的に対立していたが、日本の領台当時は、すでに平地の諸民族の多くが漢化と通婚を通して漢人移民社会に組み込まれており、漢人との二元的対立の主役は漢化を拒否して独自の文化を維持する山地の諸民族であった。漢化された諸民族は「平埔蕃」または「熟蕃」と呼ばれ、漢化されない諸民族は「蕃界」に住む「生蕃」と呼ばれていた。漢人にとって「蕃界」は「化外之地」であり、外来者と先住者は、交易や通婚などの交渉をもちながらも、居住地域によって明確に二分されていたといえる。

日本の植民政府は、漢人と「生蕃」との水平的な分離構造をそのままに、その上に日本人による支配体制を築いていった。その結果、支配者層と被支配者層という垂直的な二元構造が形成され、被支配者層の内部は水平的な二元構造が維持されることとなった(図1)。

植民政府は、支配者である外来者の日本人を「内地人」、被支配者である先住者の漢人を「本島人」と呼び、「平埔蕃」(熟蕃)を「平埔族」、「生蕃」を「高砂族」と範疇化した。本島人の内部にも、出身地や言語・方言の違いによって、福佬人と客家人、福佬人の内部でも泉州系と漳州系といった区別があり、清朝時代には分類械闘²⁾もみられたが、日本時代になると内地人との差異と対立が際立ったため、本島人内部の差異と対立は相対的に目立たなくなった。日本時代の後期には、中等・高等教育を受けた都市の本島人エリートは共通の「本島人意識」を抱き、自治権要求運動や文化運動を始めるに至る。原初的な「台湾意識」の芽生えである。平埔族の漢化は日本時代にいつそう進展したが、独自の習俗や言語が完全に失われたわけではなかった。

図1 日本統治時代の二元的・二層的構造



（出所） 筆者作成。

これは、1990年代以降、改めて重要な意味合いをもつようになる。「高砂族」は、植民政府による武力支配の下、日本への「同化」を強制されたが、独自の民族文化はおおむね維持された。しかし、同化政策によって強制された日本語が、民族の境界を越えた「共通語」を与えることともなった。「高砂族」という名称とともに、日本語は、漢人でも日本人でもない「われわれ意識」を芽生えさせるきっかけとなったようである。

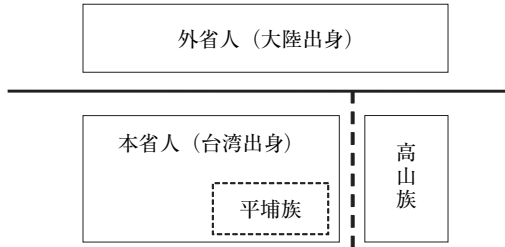
日本統治時代の特徴は、図1に示したように、外来者と先住者という二元構造が、支配者と被支配者という大きな二層構造に組み込まれていることである。この二元的・二層的構造は、第2次世界大戦後に台湾を統治することとなった蒋介石・蔣経国政権に引き継がれることとなった。新しい外来者である国民党・軍・官僚など大陸出身者が、日本人と入れ替わって支配層を成し、彼らに比して先住者である漢人とオーストロネシア語族系諸民族とは、そのまま被支配層を構成したのである（図2）。

（2） 蔣父子統治期

蒋介石政権期から、新しく大陸から移住した漢人は「外省人」と呼ばれ、日本統治時代から台湾に在住していた漢人は「本省人」と呼ばれ、区別された³⁾。これは、「内地人」と「本島人」の対立に重なるものであった。

国民党政権はまた、オーストロネシア語族系諸民族についても、日本統治時代の分断構造を基本的に維持した。「平埔族」の呼称は変わらなかったが、

図2 蒋介石・蔣経国政権時代の二元的・二層的構造



(出所) 筆者作成。

「高砂族」は「高山族」あるいは「山地同胞」(山胞)と呼称が変わり、今度は漢文化への「同化」が強制された。山地同胞という呼称は、彼らも「中国人」の一部であるということを強調したものである。

蒋介石政権とは対象的に、被支配者である本省人の側では、自分たちを「台湾人」と呼び、外省人を「中国人」と呼んでいた。これは、彼らが新しい外来者を台湾人と認めず、また自分たちを中国人とも認めていなかったことを示唆する。

外省人と本省人の対立を決定的なものにしたのは、1947年に発生した「二二八事件」であった(Lai et al. [1991], 何 [2003])。一説には2万人ともいわれる犠牲者を出した国民党軍による弾圧と虐殺は、台湾社会に深い亀裂を生じさせた。長い間、この事件については表立って語ることさえ許されない状況が続いたが、多くの犠牲者を出した本省人側だけでなく、抑圧者と同一視されるようになった外省人側にも、相手側に対する不信感が生れた。こうして、いわゆる「省籍矛盾」の種が播かれたのである。

しかしながら、王甫昌 [2003: 79-82] によると、1950年代から1960年代にかけては、「本省人意識」の覚醒と拡大はみられない。政治的には抑圧を感じながらも、本省人と外省人との社会的接触と交渉は密接化し、社会統合が進みつつあった。それが、1970年代に入ると、政治的な民主化運動の高まりとともに、本省人意識が顕在化してくるというのである(王甫昌 [2003: 82-88])。その結果、出自や移住時期を異にする文化集団が台湾には複数存

在し、それぞれの間に優劣の差はなく政治的にも対等であり、したがって国家はそれぞれに政治的、経済的、社会的、文化的な機会均等を保障する義務があるという「現代的なエスニック・イマジネーション」(現代族群分類想像)が生まれたと王甫昌 [2003: 88-89] は主張する。いよいよ省籍矛盾が顕在化してきたわけである。

それでも、1970年代半ば頃までは、図2に示した二元的・二層的な基本構造に大きな変動はなかったといえるだろう。本省人内部の差異はいまだ顕在化しておらず、オーストロネシア語族系諸民族の動きもいまだ弱かった。工業化と経済成長は進んでおり、それにともなって農村から都市へ、また農民から多様な職業へという社会移動が始まっていたが、蒋介石の死後も、蔣経国が政権を継承し、外省人支配を維持していた。エスニックな区分と社会階層とは、おおむね重複していたのである。

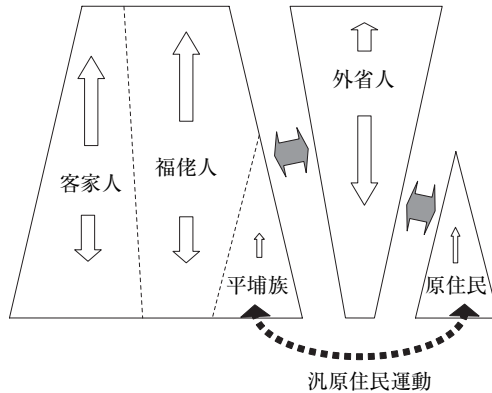
2. 二元的・二層的構造の流動化

それが大きく揺らぎ始めるのが、1970年代後半から1980年代にかけてである。2種類の揺れが社会を揺さぶった。エスニシティに関しては分離と融合、社会階層に関しては上昇と下降である。その様子を示すのが、図3である。

(1) エスニシティ

王甫昌 [2003: 133-145] によると、1980年代に入って、本省人内部で福佬人と客家人の差異が言語的に顕在化し、客家人による言語保持運動・文化復興運動が勃興してくる。これは、同時期にいっそう過熱化した民進党を中心とする反政府運動が「台湾民族主義」を掲げ、集会等で「台湾話」を使うことによって、自らのアイデンティティを激しく表出したことに、客家人が危機感を募らせたことによる。「台湾話」という名称は、通常は福佬話(閩南語)のことを指し、客家語を含まないことが多いからである。客家語を福佬話と対等な言語と認め、客家人を福佬人と対等な族群と認めよという運動

図3 二元的・二層的構造の流動化



(出所) 筆者作成。

が始まったのである。

客家人は、台湾の漢人社会のなかではマイノリティであり、言語的にも文化的にも福佬化した「福佬客」と呼ばれる客家人も少なくなかった。日本統治時代から国民党統治時代にかけて、客家人と福佬人の差異は、長らく縮小傾向にあったのである（王甫昌 [2003: 129-132]）。

それが、「本省人意識」の高揚が、しばしば「福佬中心主義」的な様相を呈したために、それに対抗する形で、自分たちを独自の族群と認識する動きが、客家人たちの間でも始まったのである。

その結果、分裂とまではいかないが、本省人内部で、エスニック・アイデンティティの分離、エスニック運動の複線化が起こったわけである。

その一方で、本省人と外省人との社会的障壁は低くなってきた。徐々にではあるが、本省人と外省人の通婚も増加した。1991年の調査によると、調査時点で40～60歳の世代の通婚率が7.1%であったのに対して、20～39歳の世代では12.2%であった（王甫昌 [1993: 83-84]）。また、国民党による「国語」（北京官話をベースにした標準語）教育の徹底により、本省人でも若い世代ほど国語が流暢に話せるようになり、また国語に対する抵抗感も弱まっている。一方、外省人も、若い世代ほど福佬話を学び、話せるようになってき

た。表1に示すように、双方のバイリンガル化が進行して、省籍の壁を越えたコミュニケーションが容易になってきたわけである。こうした点から、1980年代の省籍関係に関しては、王甫昌 [1993] も本省人と外省人の融合が進みつつあると認めていた。

このように、漢人社会に関してみると、族群の分化がみられる一方で、省籍の境界は融解がみられ、エスニックな構造の流動化が起っていたことが明らかである。

オーストロネシア語族系諸民族のなかでも、1980年代に入ると新たな動き

表1 省籍別・世代別にみた言語使用意識 (%)

世 代	国 語					
	本省籍		外省籍		合 計	
	流暢に話せる	積極的に話したい	流暢に話せる	積極的に話したい	流暢に話せる	積極的に話したい
20～29	77.4	35.0	92.7	75.6	79.4	40.3
30～39	53.9	37.1	88.3	83.3	57.4	41.8
40～49	42.7	26.3	83.9	83.9	46.1	31.1
50～59	21.5	10.5	81.8	72.7	25.1	14.2
60～64	13.1	7.1	68.2	59.1	24.5	17.9
合 計	49.3	20.9	85.5	77.6	53.1	34.1
世 代	福 佬 話					
	本省籍		外省籍		合 計	
	流暢に話せる	積極的に話したい	流暢に話せる	積極的に話したい	流暢に話せる	積極的に話したい
20～29	82.5	88.7	39.0	39.0	76.8	82.2
30～39	91.5	95.8	71.7	41.7	89.5	90.3
40～49	89.2	97.7	51.6	25.8	86.1	91.7
50～59	83.7	97.7	63.6	27.3	82.5	93.4
60～64	83.2	100.0	18.2	27.3	69.8	84.9
合 計	87.7	95.5	52.1	35.2	84.0	89.0

(出所) 王甫昌「省籍融合の本質」(張茂桂等著『族群關係與國家認同』台北 業強出版社 1993年), pp. 89, 92 (原資料は中央研究院「臺灣地區社會意向調査」1991年度第2次定期調査)。

がみられ始めた。1983年には台湾大学の在学生在が『高山青』という雑誌を不定期で刊行し始める。そして、1984年12月には、「台湾原住民族権利促進会」（原権会）が組織され、「蛮人」でも「高砂族」でも「高山族」でも「山地同胞」でもなく、台湾の本来の主人である「原住民」と自らを再定義し、内部の言語的・文化的差異を超えて「汎原住民アイデンティティ」を掲げ、1988年には「原住民権利宣言」を発表、土地権を中心とする権利回復運動に乗り出した（謝成忠 [1987], 王甫昌 [2003: 112-119]）。こうして、「原住民」という新しい族群分類が生れたのである。この動きは、漢化の進んだ「平埔族」にも波及し、漢人とは異なる言語や習俗、信仰をより所として、原住民アイデンティティを求める平埔族の人々も現れることとなった。

こうして、二元的なエスニック構造が大きく変容を始めたのが1980年代といえよう。

(2) 社会階層

工業化と経済成長にともなって、本省人の多くが、農村から都市へと流出し、さまざまな職種に進出していった。多くが工場労働者になったが、やがて起業して中小企業のオーナー経営者になる者も少なくなかった。なかには、大規模な企業グループを築き上げ、資本家階層の仲間入りを果たす者も出た（沼崎 [1989, 2004], 林忠正／林鶴玲 [1993]）。

外省人の多くは軍人や警察官、公務員、教員であった。民間経済が成長し、本省人の所得が増えるにつれて、外省人と本省人との間の格差は縮小していった。一方、「老兵」あるいは「榮民」と呼ばれる下級の退役軍人などは、生活水準も低く、相対的に下層に沈むこととなった（Hu [1989], 胡台麗 [1993]）。

しかしながら、総じて「中流化」が進行したといえるだろう。ジニ係数も、1970年代まで一貫して下がり続け、1980年代に若干上昇に転じたとはいえ、0.28～0.30の水準であった（行政院主計處 [2010: 21]）。表2をみると、エスニシティを問わず、大多数の住民が中流意識をもつに至った。

表2 エスニシティ別にみた階層意識
(%)

	福佬人	客家人	外省人	合計
上層階級	0.7	1.9	1.6	0.8
中の上階級	9.0	11.1	18.5	9.6
中層階級	51.1	46.3	53.2	48.8
中の下階級	12.2	15.7	8.9	11.6
労働者階級	19.7	16.7	8.9	17.7
下層階級	7.4	8.3	8.9	7.3
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

(出所) 林忠正／林鶴玲「臺灣地區各族羣的經濟差異」(張茂桂等著『族群關係與國家認同』台北業強出版社 1993年), p. 119 (原資料は中央研究院「臺灣地區社會意向調査」1991年度第2次定期調査)。

例外は、原住民である。山地から都市に流出する原住民も増えたが、彼らは社会階層の最下層に位置づけられることには変わりにはなかった。彼らの収入は、1985年の時点で、台湾全体の平均に比べ、山地および平地の原住民集落で57～60%、都市の原住民でも67%に留まる(王甫昌 [2003: 109])。1991年時点でも、山地および平地の原住民集落で59～62%、都市の原住民で72%である(王甫昌 [2003: 109])。

こうして、かつての二層的な階層構造は、大きな変化を遂げ始めた。上下二段に重なる構図は崩れ、台形を並べて重ねたような構図に変わってきたのだ(図3)。エスニシティと社会階層とは、まったく次元の異なるものとなったのである。

第2節 エスニシティの多元化と多層化

それでは、1990年代以降、エスニックな構造には、どのような変化がみられるのだろうか。基本的には、1980年代に始まった台湾内部の分離と融合の

プロセスが進行し、「四大族群」言説が生れた（王甫昌 [2003]，李廣均 [2008]）⁽⁴⁾。さらに、それだけではなく、新しい要素が、台湾の外部から加わってきた。「新移民」と呼ばれる外国人労働者と外国人配偶者の流入である。

1. 四大族群

1970年代の「本省人意識」の台頭，1980年代の「原住民意識」，「客家人意識」の興起に加え，1990年代に「外省人意識」が顕在化したと王甫昌 [2003: 151-157] は主張する。李登輝の下で政治の台湾化が進み，陳水扁の下で中華人民共和国との対立が先鋭化したことに対し，外省人の危機感が募った結果であった。それまでも一部には「榮民」のように独自のアイデンティティを形成したグループもあったが（Hu [1989]，胡台麗 [1993]），出身地も言語・方言も多様な外省人が共通の「外省人意識」を抱くことはなかった。それが，初めて族群として自他ともに認知されるようになったのである。

これにより，台湾には，福佬人（閩南人），客家人，原住民，外省人という「四大族群」が存在し，それぞれが独自の歴史と文化・言語を有するという言説が生れ，広く社会に流布するようになったのである。そして，それぞれの文化と言語は対等であり，台湾社会は複数の文化・言語を有する「多元社会」であるという認識が生まれた。「多元文化」論の登場である（吳天泰編 [2008]，李廣均 [2008]）⁽⁵⁾。

四大族群言説の最大の特徴は，福佬人，客家人，原住民，外省人を，対等な族群として並置してみせることである。それぞれの当事者は，さまざまな意味でマイノリティ意識をもつかもしれないし，差別と抑圧を感じているかもしれない。しかし，それゆえに，自らの族群の他の族群との対等性を強烈に主張する。実際上も，特定の族群が政治と経済の実権を握って他の族群を支配するという状況ではなくなった。

また，四大族群の全てがすでに台湾社会に「根付いて」いる。唯一，外省人が外来者の性格を残してはいるものの，移住から60年が経ち，第1世代で

さえ人生の大半を台湾で過ごしており、外省人の大半を占めるようになった第2世代、第3世代になれば純粋に台湾生まれの台湾育ちである。

その結果、支配と被支配、外来と先住という従来の二元的・二層的な視点では、台湾社会のエスニシティは捉えられなくなってきた。そして、それぞれの族群が内部の多様性を増している。

たとえば、原住民の場合、文化と言語の境界を越えた汎原住民意識の醸成とともに、固有の文化と言語に基づく差異化も進行している。

詳しくは石垣直による本書第3章に譲るが、1990年代以降、政府の原住民政策は急速に進展し、とくに民進党政権になって原住民の法的地位が確立した(黄樹民[2010])。1994年の国民大会では「山地同胞」という語が正式に「原住民」に変更され、1996年には行政院原住民委員会(2002年より行政院原住民族委員会)が中央省庁のひとつとして設立された。1997年の第4次憲法改正によって、原住民族条項⁶⁾が加えられ、「国家は多元文化を肯定し、積極的に原住民族の言語と文化を擁護発展させなければならない」(修正第10条第11項)こと、「原住民の地位と政治参加を保障し、教育文化、交通水利、衛星医療、経済土地および社会福祉に対して補助を保障し、その発展を促進する」(同第12項)ことが憲法に明記された。1999年に草案が提出されていた「原住民族基本法」が2005年に成立した。前年の2004年には、原住民向けのテレビ局が国営で開設されている。

そして、従来から「山地同胞」に認定されていたアミ族、パイワン族、タイヤル族、プスン族、プユマ族、ルカイ族、ツォウ族、サイシャット族およびタオ(ヤミ)族に加え、つぎつぎと原住民が公式に認定されるようになった。2001年にはサオ族、2002年にはクバラン族が原住民に認定された。どちらも「平埔族」である。2004年には、タイヤル族の一部が独自のタロコ族として分離認定され、2007年にはサキザヤ族がアミ族から分離認定された。そして、2008年にはセデック族が14番目の原住民として認定されている。独立した原住民として認定を求める「平埔族」はほかにも存在する。

このような原住民の追加認定は何を意味するのだろうか。それは、四大族

群より下位のレベルにおけるエスニック・アイデンティティの公的な「承認」である。法的地位や権利は、原住民として保障されている。他の族群との対比においても、原住民というアイデンティティはある。しかし、より個別的で地域的なエスニック・アイデンティティは、タイヤルではなくタロコであり、アミではなくサキザヤなのである。新たに原住民に認定されたサオ族やクバラン族とは違い、タロコ族もサキザヤ族もすでに原住民族籍をもっていた。にもかかわらず、彼らは固有の族名にこだわった。そこには、いわゆる族群政治とは違ったアイデンティティ・ポリティクスがある。ここに、エスニック構造の多元化と多層化の一端が現れている。

外省人の場合も、事態は複雑である。彼らは、外省人であると同時に、山東人であり、浙江人である。また、「台湾人」でもあり、「中国人」でもあり得る。コルキュフ [2008] は、自身を台湾人と認識する外省人が増えており、外省人の「本土化」が進んでいると主張する。コルキュフは、彼らは最終的には「台湾人」アイデンティティをもつに至るだろうと大胆に予測する。しかし、上水流が本書第4章で明らかにしているように、「中華民国」指向が強い外省人もまた存在する。しかも、国家アイデンティティが中華民国であるにもかかわらず、上水流のインフォーマントは台湾への愛着を語り、自身を台湾の「正当な住人」とみなしているのである。移住の経緯こそ違え、自分たちもまた台湾社会の一員であると語る彼らのエスニック・アイデンティティは、一次元的に捉えることはできない。

事態の複雑さは、福佬人も客家人も変わらない。四大族群というのは、あくまでもひとつの言説であり、それで台湾社会のエスニシティの現状を十分に把握することはできない。それぞれの族群内部でもアイデンティティは多様であり、また一人の個人にとってもアイデンティティは多元的で多層的なのである。

2. 新移民

1990年代に入ると、台湾に新しい「外来者」が増大し始めた。東南アジア諸国から働きに来る外国人労働者と、中国大陸および東南アジア諸国から台湾男性に嫁いで来る「外籍新娘」すなわち「外国人花嫁」である⁽⁷⁾。この両者は、台湾のエスニシティに新たな次元を加え、台湾のエスニック構造をいっそう複雑化させている。

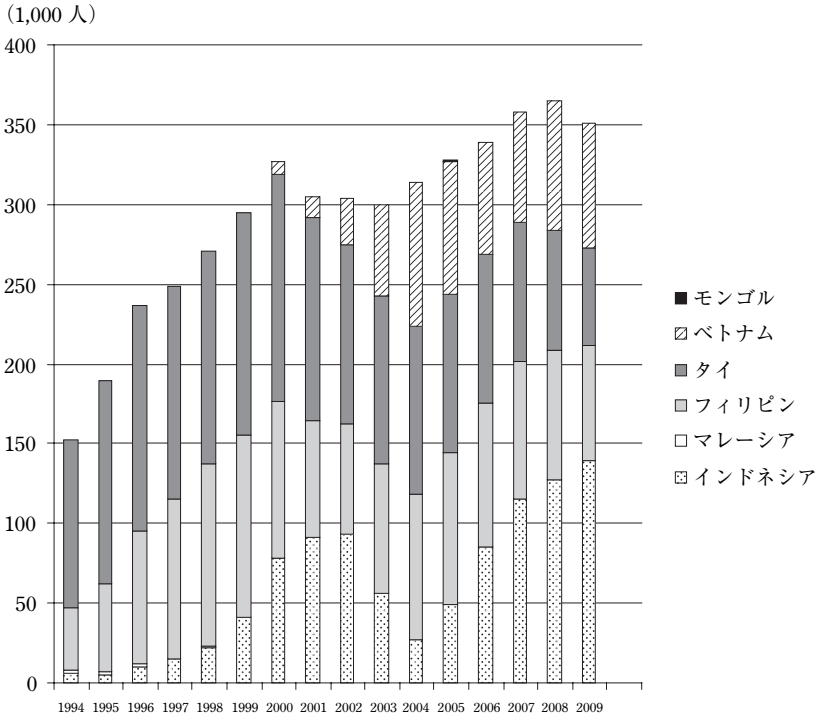
(1) 外国人労働者

図4が示すように、1990年代半ばから、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイといった東南アジア諸国から労働者が大量に流入し始めた。2000年代に入ると、ベトナム人労働者の流入も増加した。その総数は、2000年に30万人を超え、都市によって多少の変動はあるものの一貫して増え続け、2007年には35万人に達している。

図5は、産業別にみた外国人労働者の増減を示している。興味深い点が3つある。ひとつは、製造業と建設業の分野で働く外国人労働者が1990年代に急増したが、2000年代には製造業分野での増加が止まり、建設業分野では減少していることである。もうひとつは、1990年代半ばから2000年代を通して、外国人看護師・介護士の数が急増していることである。そして3つめは、1990年代末までに1万人を超えるまでに増えた外国人家政婦が、2000年代に入ってしだいに減少していることである。

製造業や建設業で働いているのは男性であり、看護師・介護士・家政婦として働いているのは女性である。外国人男性労働者は、台湾人男性に替わり、低賃金の非熟練工として、工場や工事現場の人手不足を穴埋めする形で流入してきた。彼らは、底辺のブルーカラー労働市場を多国籍化しているわけである。一方、外国人女性労働者は、少子高齢化にともなう看護・介護需要の増加、家庭環境の変化に呼応する形で流入している。彼女たちは、医療・福

図4 外国人労働者の増加（滞在者数）

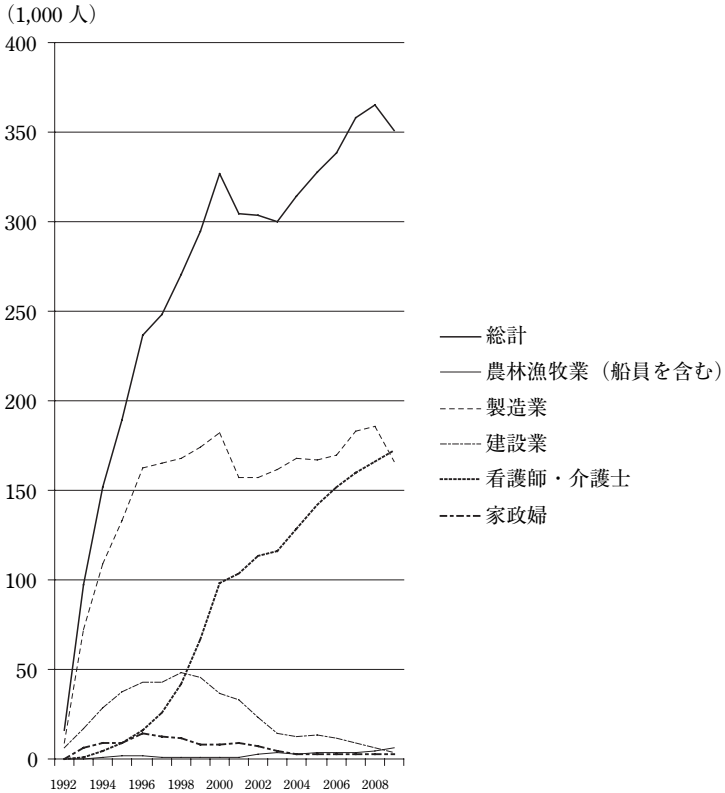


(出所) 行政院勞工委員會『99年版勞動統計年報』(<http://statdb.cla.gov.tw/html/year/year99/rptmenuyear.htm>, 2011年1月10日アクセス), p. 316のデータより筆者作成。

社の補助労働市場を多国籍化しているばかりでなく、老人介護や家事・育児の補助労働者として台湾人家庭の内部に入り込んでいるのである。

図6は、2009年時点の外国人労働者の産業別国籍構成を示している。図からは、国ごとの明確な特徴が読み取れる。すでに述べたように、業種とジェンダーとは深く関わっているので、その特徴は以下のようにまとめることができる。インドネシア人労働者の大多数は女性で看護師・介護士という医療福祉現場の補助労働者である。フィリピン人労働者とベトナム人労働者の場合は、製造業で働く男性も多いが、看護師や介護士、家政婦として働く女性

図5 産業別外国人労働者数の増減（滞在者数）

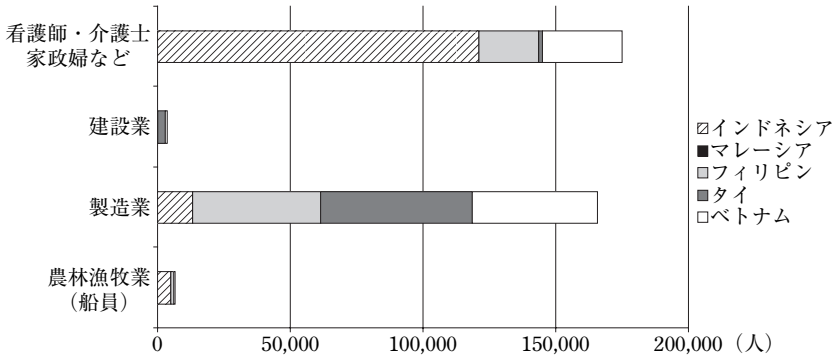


(出所) 行政院勞工委員會『99年版勞動統計年報』(<http://statdb.cla.gov.tw/html/year/year99/rptmenueyear.htm>, 2011年1月10日アクセス), pp. 312-313のデータより筆者作成。

も少なくない。タイ人労働者は、ほとんど男性で、製造業と建設業に従事している。

言語も文化も異なる人々が、まだまだ少数とはいえ、さまざまな職場だけでなく、家庭のなかにも入り込んでいるというのが、現代の台湾社会である。彼ら／彼女らは、必ずしも「国語」を十分に話せるとは限らない。単純肉体労働の現場ではそれほど問題にならないかもしれないが、医療現場や家

図6 産業別にみた外国人労働者の国籍構成（2009年の滞在者数）



(出所) 行政院勞工委員會『99年版勞働統計年報』(<http://statdb.cla.gov.tw/html/year/year99/rptmenyear.htm>, 2011年1月10日アクセス), p. 314のデータより筆者作成。

(注) マレーシア人は製造業に10名含まれるのみである。

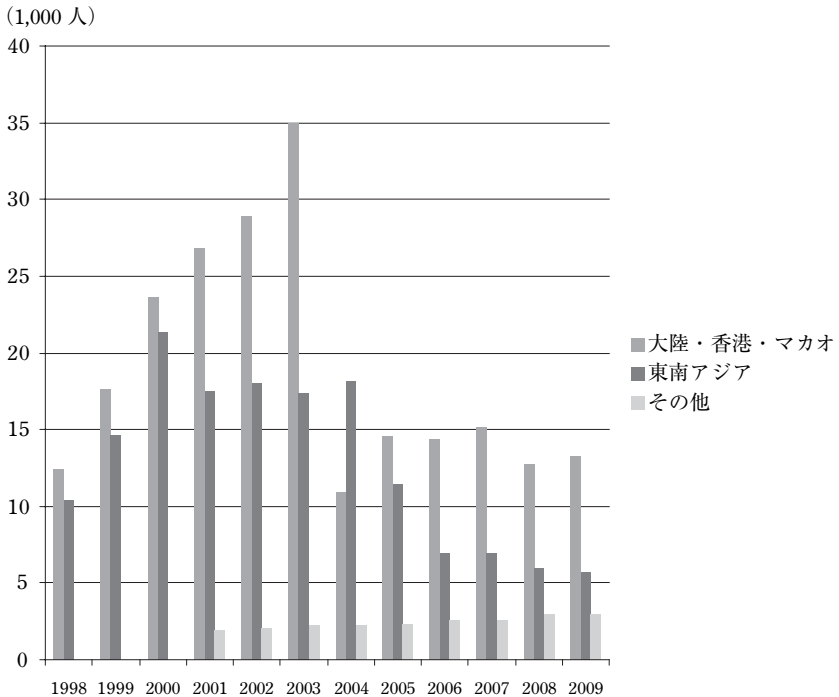
庭での看護・介護においては大きな問題である。にもかかわらず、近年こうした医療福祉の補助労働力の大部分を外国人労働者が供給している。従来なかった領域で、新たなエスニック関係が構築され始めているのである。

(2) 「外籍新娘」

外国人労働者を上回るペースで急増しているのが、海外からの「花嫁」の流入である(図7)。台湾内の未婚化・晩婚化の進行にともなって、台湾男性の多くが、配偶者を台湾の外に求めるようになったのだ。花嫁の送り手は、おもに中国大陸(香港、マカオを含む)と、インドネシアやベトナムといった東南アジアである。中国大陸出身者との婚姻は、1997年には台湾の婚姻総数の16%に上り、2003年には21%に達した(王宏仁 [2008: 114])。一方、東南アジア出身者との婚姻は、この間だいたい11%前後であった(王宏仁 [2008: 114])。台湾全体の結婚数の4分の1から3分の1が「国際結婚」という状況が、ここ十数年続いているのである。

図7をみると、少数ではあるが、中国大陸や東南アジア以外の外国人との国際結婚も漸増している。こちらは、台湾人男性と結婚する外国人女性ばかり

図7 外国籍配偶者の増加



(出所) 行政院主計處『社會指標統計』2009年版, pp. 24-25のデータより筆者作成。

りでなく、外国人と結婚する台湾人女性も多く含んでいる。

そうすると、台湾人男性が「発展途上国」から妻を迎えているのに対し、台湾人女性は「先進国」の男性を夫にしているようである。つまり、国際的なハイパーガミイ（上昇婚）がみられるわけだ。従来からみられる現象であるが、それが大規模化しているところに最近の特徴がある。とくに、中国大陸と東南アジアからの結婚移民の激増は、子どもの養育と教育への影響も考慮すると、長期間にわたって台湾社会に多大の影響を与える可能性をもつ社会現象といえよう。

現在でも顕著な影響が、台湾のエスニック構造に対するものであろう。従

来からあった台湾内部での族群間の通婚とは比較にならないほどの「多文化化」が、台湾の多くの新婚家庭で始まっているからである。しかも、その多文化化とは、ジェンダー文化や食文化、言語使用といったさまざまな次元が複雑に絡み合ったプロセスなのだ。

たとえば、王宏仁らの研究（田晶瑩／王宏仁 [2006]、Wang and Tien [2009]）によると、ベトナム人女性と結婚する台湾人男性は、男性は一家の大黒柱であるという考えの持ち主が多く、女性には「伝統的」な美德を求める傾向があるという。一方、台湾に嫁いで来るベトナム人女性も、台湾の現代的な女性に比して、保守的な性別役割意識をもっているという指摘もある（李美賢 [2003]）。そのため、結婚や家庭生活に関する価値観は、台湾人の夫とベトナム人の妻とでそれほど大きく違わないという調査報告もある（張翰璧 [2007: 69-94]）。王宏仁 [2008: 115] は、通常強調される経済的な理由に加え、台湾の「男性性」文化も東南アジアからの結婚移民の増加に一役買っていると主張する。台湾とベトナムのジェンダー文化が絡み合って、国際結婚が成り立っているわけである。

保守的な性別役割意識をもつがゆえに、ベトナム人花嫁たちは、「良い嫁」として台湾人家庭に入ろうと努力しているが、その一方で、ベトナム人同士でベトナム料理を作る会をもったり、少しずつ自分の家庭にもベトナム料理を取り入れていくなど、ベトナム人というエスニシティを維持している（林開忠 [2006]）。彼女たちは、台湾の食文化にも着実に変化をもたらしている。

また、張翰璧 [2007: 112-119] によると、ベトナム人妻たちは、家庭のなかで、相手に応じて、国語、福佬話、客家話、ベトナム語を使い分けて生活している。台湾の多言語状況に、ベトナム語が加わったわけである。

中国大陸や香港出身の花嫁は、漢族文化と「中国語」を共有してはいるが、日本の植民地時代から約100年間にわたって中国大陸や香港とは異なる歴史を歩んできた台湾での生活は、彼女たちにとっては「異文化」であることが多い。夫の両親が「本省人」であれば、福佬話にも習熟しなければならないだろう。台湾人男性と中国大陸出身女性との結婚も、程度の差はあれ、多文

化状況をもたらしているのである。

3. エスニシティの「個人化」と「国際化」

以上、1990年以降の台湾社会におけるエスニシティの多元化と多層化の様相を概観してきたが、それは単に族群の区分が増加したとか、区分の軸が多様化した以上の変化をもたらしたようである。それは、エスニシティの「個人化」と「国際化」である。

「個人化」の典型は、外籍新娘である。彼女たちは、集団としてまとまって存在するわけではない。ベトナム人というのは、ひとつの家族のなかの、ひとりの女性の属性である。周囲の人々は、彼女との個人的接触と交渉を通して、ベトナム人というエスニシティに触れる。

それは、外国人家政婦の場合も同様であり、工場や建設現場の外国人労働者の場合も同様であろう。そして何よりも、いわゆる四大族群に属する台湾の住民たちも、集団として対立するのではなく、個人として、族群を異にする人々と接するようになってきたのではないだろうか。

「国際化」の典型も、外国人労働者や外籍新娘といった新移民たちである。ベトナム人妻は、結婚後も本国の「実家」との関係を断ち切ることはない。彼女を通して、台湾人男性のエスニック関係は、国境を越えて広がっていく。同様に、外国人労働者も出身国と台湾との間に新たなエスニック関係のネットワークを生みだしている。そして、台湾内の四大族群にしても、海峡を越えた中国大陆との関係が緊密化するに連れ、また台湾経済がグローバル化するに連れ、国境を越えたエスニック関係を築きつつある。

そうすると、エスニシティは、ミクロな個人の属性になりつつあると同時に、マクロな国際関係の属性にもなりつつあるということにならないだろうか。「族群」は、もはや群れないのである。台湾のエスニシティは、集団的な社会の構成要素ではなく、グローバルに展開するパーソナルな「族性」とでもいうべきものに変容しつつあるのだ。

第3節 社会階層の多元化と多層化

1990年代から2000年代にかけて、基本的には台湾社会の「中流化」は継続している（蘇國賢 [2008, 2009]）。時々危機に見舞われながらも、経済は成長を続け、国民所得も上昇している。1人あたりGDPは、購買力平価ベースで見れば日本並みになっている。しかしながら、その一方で新たな格差も発生している。そして、その結果、社会階層の多元化と多層化が進んでいるのである。

1. 中流化の継続

表3は、近年の台湾における世代別の階級構成を示したものである。共通していえることは、本人の階級でも、父親の階級でも、世代が若くなるに連れて、一貫して農業が減少し、その他が増加していることである。しかも、専門職と事務職の増加が顕著であり、ホワイトカラー化が進んでいることが伺える。

表3で興味深いのが、自営業に関しては、本人の階級だけは、男女ともに、1956～1965年生まれ以下の世代では減少に転じているという点である。これは、若い世代でのサラリーマン化が進行し、いわゆる「老板」が減少していることを示唆している。若い世代では公務員志向が強まっているといわれるが、経済の成熟とともに、独立起業は困難になってきたようである。

主観的な階層意識についても、1990年から2006年にかけて、自分は「中層階層」に属すると答える人の比率は、男性がほぼ5割、女性がほぼ6割であり、2002年から2006年にかけては増加傾向を示している（蘇國賢 [2008: 196]）。

表3 階級構造の世代変化

(%)

世代	男性				女性			
	1928-45生	1946-55生	1956-65生	1966-75生	1928-45生	1946-55生	1956-65生	1966-75生
本人の階級								
専門職	18.7	26.9	29.5	26.7	9.6	19.0	24.0	29.3
事務職	4.3	6.7	7.7	7.6	10.9	18.3	27.8	42.2
自営業	20.9	27.8	24.1	23.2	16.2	19.5	17.1	10.3
農業	29.4	10.0	6.1	11.6	35.8	9.4	3.8	0.7
熟練工	12.2	16.1	20.4	17.9	11.8	15.5	15.8	9.7
半熟練工	14.6	12.6	12.2	13.1	15.7	18.3	11.6	7.9
父親の階級								
専門職	9.6	13.9	13.0	17.0	8.6	12.9	16.0	19.2
事務職	4.0	5.5	6.1	5.4	3.4	7.0	5.6	7.3
自営業	14.3	16.8	20.4	27.2	12.6	17.3	22.9	25.2
農業	60.9	47.0	37.3	23.0	65.9	47.0	33.4	19.1
熟練工	4.6	8.2	12.5	15.0	4.3	7.1	10.7	15.0
半熟練工	6.6	8.7	10.8	12.4	5.2	8.7	11.4	14.3

(出所) 蘇國賢「階級與階層」(王振賢／瞿海源編『社會學與台灣社會』第Ⅲ版 台北 巨流圖書公司 2009年), p. 111のデータより筆者作成(原資料は「台湾社会變遷基本調査1992-2005」に依拠)。

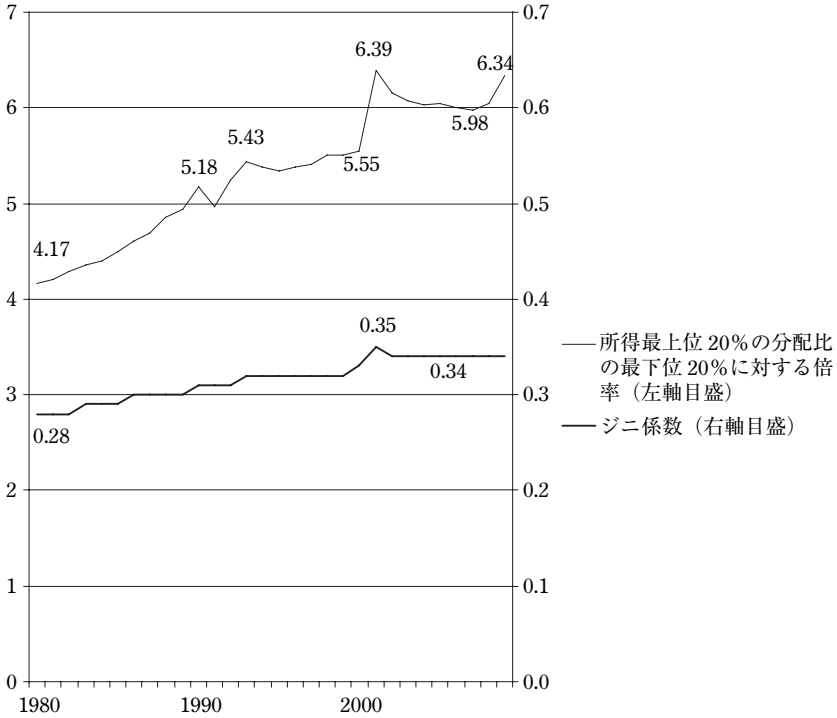
2. 新たな格差の発生

しかしながら、細かく見ていくと、さまざまな格差が生れていることもまた明らかである。図8は、所得分配の不平等度の変化を、所得5分位の最上位と最下位の比およびジニ係数で示したものである。どちらの指標でみても、緩やかではあるが、所得格差がわずかながら拡大していることがわかる。

(1) 経済格差

たとえば、原住民と一般台湾人との所得格差がいつそう大きくなっている。調査によると、1985年には、原住民家庭の平均収入は21万元であるのに対して台湾全体の平均収入は46万元だったので、その差は約2.3倍であったが、

図8 台湾の所得分配（1980～2009年）



(出所) 行政院主計處「九十八年家庭取支調査報告」, p.21のデータより筆者作成。

2006年には原住民家庭の平均32万元に対して台湾全体の平均は100万元を超えており、その差は3倍以上に拡大した(章英華等 [2010: 90])。

本省人と外省人の格差については、1994年の時点で外省人のほうが中上層階級に属する比率が高いという分析もあるが(呉乃徳 [1997])、その後は外省人が階級的地位を維持できておらず、格差は縮小しているという研究が出ている(蘇國賢/喻維欣 [2007])。

原住民を除いて、族群間の格差は縮小しているのに対して、階級間の格差は拡大しているようである。1992年と2007年の家計取支を比較して、林宗弘 [2009: 128-130] は、資本家の所得がもっとも伸び、専門職と熟練工の賃金

も上昇しているのに対して、事務職や自営業者の収入は下降しており、非熟練工の賃金は伸びてはいるが最底辺レベルに留まっている。階級間格差は開いているというのが林宗弘の結論であると述べている。

もう1点、興味深い変化がある。所得5分位の最上位クラスと最下位クラスの間で、世帯規模の格差と就業人数の格差が拡大しているというのである。2006年には、最上位クラスの平均世帯人数が4.37人であるのに対し、最下位クラスは1.82人であり、しかも最上位クラスの平均就業人数が2.32人であるのに対し、最下位クラスは0.59人であり、格差は3.93倍となっており、1980年の1.82倍から倍増しているという（蘇國賢 [2008: 195]）。これは、独居老人のような単身世帯や母子家庭の困窮化を示唆するものと思われる。

(2) ジェンダー格差

最近20～30年の間に、女性と男性の格差は縮まっているように見える。1981年と2006年を比較すると、女性の就業率は39%から49%に上昇し、大卒以上の労働力に占める女性比率は26%から45%に増加し、女性賃金の男性賃金に対する割合も64%から79%以上に上昇した（林宗弘 [2009: 123]）。また、1992年と2007年を比較すると、専門職や管理職、資本家層に進出する女性が増加している（林宗弘 [2009: 124-125]）。

その一方で、1970年より前に生れた世代と後に生まれた世代を比較すると、高級管理職や資本家層に進出する女性は、後者の方が少なくなっている（林宗弘 [2009: 125]）。また、離婚の増加や未婚化によって単身女性の世帯が増えているが、単身女性世帯や母子家庭は低所得者層に属する比率が高く、とくに子どもを抱えていると困窮度が高まるという調査報告もある（薛承泰 [2004, 2008]）。さらに、外国人女性の多くが看護師や介護士、家政婦として働く者が多いことから、底辺層に属する単身女性が増加していると思われる。

そうすると、「男女格差」が減少する一方で、種々の「女女格差」が増大しているといえそうだ。藍佩嘉（Lan [2006], 藍佩嘉 [2008]）が赤裸々に描写する「豊かな台湾人主婦」と「外国人家政婦」の格差は、その最たるもの

であろう。

(3) 「文化」格差

外国人労働者や外籍新娘の増加は、新しい文化的不平等を生み出している。外国人労働者たちは、単に所得の上で最底辺に位置づけられるだけではないということである。言語が不自由で、台湾の漢民族文化にも馴染みが薄いため、文化的にも困難な生活を余儀なくされている。そのうえ、彼らの多くが、台湾人の偏見と差別に晒されていると感じているのだ。外国人妻の多くは、外国人労働者と同様、言語が不自由で、台湾の漢民族文化に馴染みが薄い場合が多い（施ほか [2007b]）。

さらに、母親が外国人の場合、子どもの教育に深刻な影響が出ることもある（施ほか [2007a]）。国語のできない母親であれば、学校から渡されるプリントさえ読めないこともあるし、子どもの勉強を十分みてやれない可能性が出る。多国籍家族に生まれた子どもは、教育上のハンディキャップを背負う可能性が高いのである。

新しい「人種差別」も生まれている。藍佩嘉 [2005] によると、外国人家政婦を斡旋する仲介業者が、「扱いにくいフィリピン人」に対して「従順なインドネシア人」という宣伝を展開した結果、フィリピン人家政婦を雇う台湾人が減少し、インドネシア人家政婦が増えているそうである。

このように新移民の増加によるエスニシティの複雑化は、文化的不平等の増大という回路を経て、社会階層の多元化と多層化に寄与しているのである。

3. 社会階層の「個人化」と「国際化」

以上、最近20年の社会階層の変容を概観したが、中流階層意識の定着とは裏腹に、さまざまな次元に沿って格差の拡大がみられる。族群や学歴、職業だけではなく、ジェンダーや年齢、未婚か既婚か離婚か、配偶者は同国人か外国人か、子どもの有無などが絡み合って、階層構造を複雑化しているの

ある。

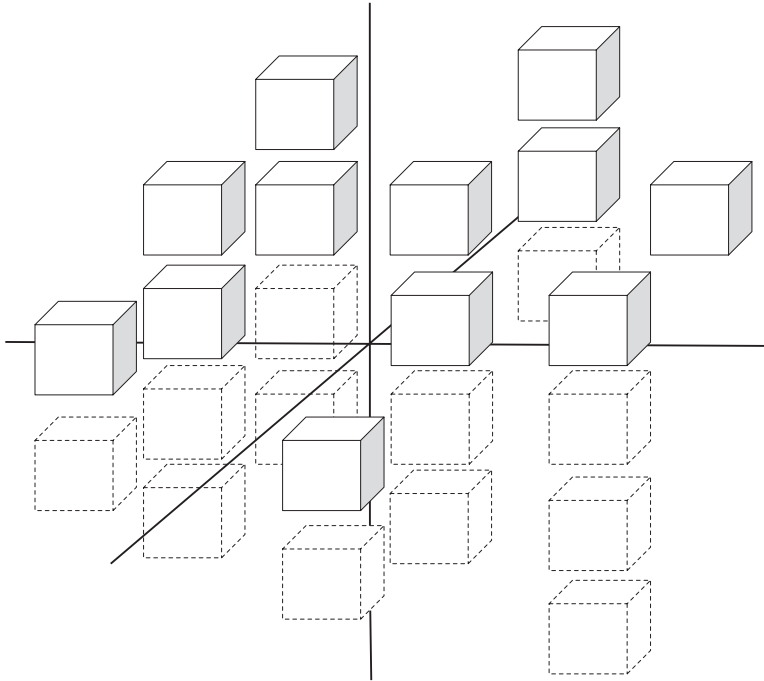
その結果、エスニシティの場合と同様に、社会階層もまた「個人化」と「国際化」の様相を呈している。もはや社会階層は、世帯単位で論じることにはできないし、台湾内で語ることもできないのである。それは、外国人労働者や外籍新娘（外国人妻）に限られたことではない。中上層の企業経営者や管理職の活動が国際化するに連れて、海外生活を体験する家族が増えている。そうした家族の子どもたちは、バイリンガル・バイカルチュラルに育っている。また、中上層階層にあっては、子どもを英語幼稚園に通わせるなどして、将来の海外生活に備えようという親たちも増えている。帰国子女かどうか、英語能力があるかどうかといった個人的要素が将来の社会階層における位置づけに大きく影響してくるのであり、どのような個人的要素が重要かは国際的要因が大きく左右するのである。

おわりに

エスニシティと社会階層の多元化と多層化を視覚化すると、図9のように描けるのではないだろうか。大きな枠組はもはや存在せず、小さな箱が多次元空間のなかで上下左右に並ぶ。図9では3次元に描いているが、もちろん次元は3つに限られない。そして、どの箱にも多様な個人が含まれ、ひとまとめに論じることにはできない。

図9のイメージでは、既存の族群や社会階層は細分化され、差異が増大しているように見える。そして、差異の次元も多数化している。これが、多元化と多層化の現代的様相である。これは、台湾社会の構成員が多様化していることを意味するわけだが、それでは、増大する差異は、遠心力として働き、台湾社会の統合を困難にするのだろうか。それとも、差異は障碍とならず、差異を超えてなんらかの求心力が働き、台湾社会の統合は保たれるのだろうか。最後に、この点を展望したい。

図9 エスニシティと社会階層の「多元化」と「多層化」(イメージ図)



(出所) 筆者作成。

福佬人や客家人の族群意識が高まり、はっきりと支持政党が分かれるような事態が生じれば、本省人というかつてのまとまりを弱めるという意味で、族群が遠心力として働く可能性はあるかもしれない。漢人と新移民との間でも、言語と文化の障壁が遠心力となる可能性もある。

しかしながら、族群の垣根を越えて求心力が働く可能性もある。本章でも触れたように、「国語」を強制された本省人だけでなく、外省人もバイリンガル化の傾向をみせているし、族群間の通婚も増加の傾向にある。これらは、差異を超えた関係を強化するという意味で、求心力として働いているといえるのではなかろうか。また、漢人と原住民の間でも、第3章の石垣論文が示すように、原住民の国民党支持が続くならば、国民党が求心力として働き、

原住民と漢人がより接近する可能性もある。また、第4章の上水流論文が示すように、外省人意識のもっとも強い層でさえ、台湾を去ることなく、台湾社会の正当な一員であることを強く主張している。これは、台湾社会の求心力を例証してはいないだろうか。

第5章の田上論文が明らかにしているように、一部の学者や政府は、「多元文化」イデオロギーに求心力を発揮させ、族群や新移民の間の言語文化の差異を残しつつ、台湾社会の統合を保とうと試みているようである。しかしながら、それが成功するかどうかは、まだわからないとしかいえない。

「本土化」言説とは裏腹に、社会の複雑性は増大の一途を辿っている。エスニシティと社会階層の「個人化」と「国際化」がさらに進めば、家族という枠内での統合が困難になる事態もありうるし、新移民の増加は台湾という枠を超えたレベルでの社会統合を要請する可能性もある。台湾社会の統合に関わる要因が増加し、複雑化していることは確かであろう。しかしながら、少なくとも現時点においては、族群間や階層間に深刻な対立はみられないし、新移民が大きな社会問題を引き起こすといった事態も生じていない。

現代台湾社会においては、遠心力になりうる要因が新しく出現している一方で、一定の求心力が働いて社会統合を維持しているようである。今後は遠心力が強まるのか、それとも求心力が保たれるのか、見守っていきたい。

[注] _____

- (1) 第2次大戦後に国民党政権とともに台湾に移住した「外省人」と、日本統治期以前から台湾に居住していた「本省人」との政治的・社会的対立。外省人・本省人については、後に詳述する。
- (2) 福佬人と客家人、あるいは福佬人内部でも泉州系と漳州系というように、出自や系統を異にする集団同士が、土地や水をめぐって武力的に抗争すること。
- (3) 外省人・本省人という呼称が広く用いられるようになったのは、1945年11月以降のことであるらしい。Tzeng [2009: 136-138]によると、民報という新聞紙上で、この呼称が使われ始めたそうである。
- (4) 族群という語は、そもそもエスニックグループ (ethnic group) という社会

科学の学術用語の中国語訳である。それが研究者のみならず、政治家や社会運動家に使われ始め、マスコミを通して広く台湾社会に流布され、1990年代以降すっかり日常語化した。それは王甫昌 [2003] のいうように「想像の分類体系」なのだが、それが政治的にも社会的にもリアリティをもつようになったのである。

- (5) 「多元文化」論について詳しくは、田上智宜による本書第5章を参照。
- (6) 現在、法律上の正式名称は「原住民族」である。しかし、一般的な呼称に従って、本章では族群名として「原住民」を用いる。
- (7) 新移民に関する論文集としては、夏曉鵬編 [2009] がまとまっている。外国人労働者全般に関しては、夏曉鵬等編 [2008] を参照されたい。外国人家政婦の実態については、吾非奴 [2006]、藍佩嘉の詳細なモノグラフ (Lan [2006]、藍佩嘉 [2008]) がある。外籍新娘については、夏曉鵬 [2002]、夏曉鵬編 [2005]、顔國鉉 [2006] がある。張翰璧 [2007] は、とくに客家人男性と東南アジア女性の婚姻を取り上げたモノグラフである。

【参考文献】

<日本語文献>

- 何義麟 [2003] 『二・二八事件——「台湾人」形成のエスノポリティクス——』東京大学出版会。
- コルキュフ、ステファン (高格孚) [2008] (上水流久彦／西村一之訳) 『外省人の現在——変容する国家とアイデンティティ——』風響社 (高格孚『風和日暖——台湾外省人與國家認同的轉換——』台北 允晨文化 2004年)。
- 施昭雄／陳俊良／許詩屏／桂田愛 [2007a] 「中国大陆及び東南アジアの外国籍配偶者移民の背景から考察する『新台湾之子』の教育問題とその対策」(『福岡大学研究論集A』第6巻第6号 121-138ページ)。
- [2007b] 「台湾における外国籍及び中国大陸籍配偶者の現状と展望」(『福岡大学研究論集A』第6巻第6号 139-154ページ)。
- 沼崎一郎 [1989] 「現代台湾における民間大企業の所有と経営——上場企業の分析——」(『アジア経済』第30巻第12号 79-102ページ)。
- [1998] 「エスニシティーと社会階層」(若林正文編『もっと知りたい台湾』第2版 弘文堂 46-68ページ)。
- [2002] 「現実の共同体、架空の政体——台湾社会の変容と『新しい台湾意識』の出現——」(『東北人類学論壇』第1号 19-29ページ)。
- [2004] 「高度経済成長期台湾における『老板』的企業ネットワークの生成と

展開——1949年～1989年——」（『東北大学文学研究科研究年報』第53号 210-194ページ）。

<中国語文献>

- 胡台麗 [1993]「芋仔與番薯——臺灣榮民的族群關係與認同——」（張茂桂等『族群關係與國家認同』台北 業強出版社 pp. 279-325）。
- 黃樹民 [2010]「全球化與台灣原住民基本政策之變遷與現況」（黃樹民／章英華編『台灣原住民政策變遷與社會發展』台北 中央研究院民族學研究所 pp. 15-50）。
- 紀玉臨／周孟嫻／謝雨生 [2009]「台灣外籍新娘之空間分析」（『人口學刊』第38期 pp. 67-113）。
- 藍佩嘉 [2005]「階層化的他者——家務移工的招募，訓練與種族化——」（『臺灣社會學刊』第34期 pp. 1-57）。
- [2008]『跨國灰姑娘』台北 行人出版社。
- 李廣均 [2008]「籍貫制度・四大族群與多元文化——國家認同之爭下的人類分類——」（王宏仁／李廣均／龔宜君編『跨戒——流動與堅持的台灣社會——』台北 群學出版 pp. 93-110）。
- 李美賢 [2003]「離鄉・跨海・遠嫁・作『他』婦——由越南性別文化看『越南新娘』——」（蕭新煌編『台灣與東南亞——南向政策與越南新娘——』台北 中央研究院亞太區域研究專題中心 pp. 215-247）。
- 林開忠 [2006]「跨越越南女性族群邊界的維持——食物角色的探求——」（『台灣東南亞學刊』第3卷第1期 pp. 63-82）。
- 林忠正／林鶴玲 [1993]「臺灣地區各族羣的經濟差異」（張茂桂等『族群關係與國家認同』台北 業強出版社 pp. 101-160）。
- 林宗弘 [2009]「台灣的後工業化——階級結構的轉型與社會不平等，1992-2007——」（『臺灣社會學刊』第43期 pp. 93-158）。
- 蘇國賢 [2008]「台灣的所得分配與社會流動之長期趨勢」（王宏仁／李廣均／龔宜君編『跨戒——流動與堅持的台灣社會——』台北 群學出版 pp. 187-217）。
- [2009]「階級與階層」（王振實／瞿海源編『社會學與台灣社會』第3版 台北 巨流圖書公司 pp. 103-128）。
- 蘇國賢／喻維欣 [2007]「台灣族群不平等的再檢討——解釋本省／外省族群差異的縮減——」（『臺灣社會學刊』第39期 pp. 1-63）。
- 田晶瑩／王宏仁 [2006]「男性氣魄與『娶』的跨國婚姻——為何台灣男子要與越南女子結婚？——」（『台灣東南亞學刊』第3卷第1期 pp. 3-36）。
- 王甫昌 [1993]「省籍融合的本質」（張茂桂等著『族群關係與國家認同』台北 業強出版社 pp. 53-100）。
- [2003]『當代台灣的族群想像』台北 群學出版。

- 王宏仁 [2008] 「台灣的移民接受政策與國家認同」(王宏仁／李廣均／龔宜君編『跨越——流動與堅持的台灣社會——』台北 群學出版 pp. 111-126)。
- 吾非奴 [2006] 『我家的外勞』三重 新路出版社。
- 吳乃德 [1997] 「檳榔和拖鞋——台灣階級流動的族群差異及原因——」(『台灣社會學研究』第1期 pp. 137-167)。
- 吳天泰編 [2008] 『多元文化』台北 二魚文化事業。
- 夏曉鵬 [2002] 『流離尋岸——資本國際化下的「外籍新娘」現象——』台北 台灣社會研究雜誌社。
- 夏曉鵬編 [2005] 『不要叫我外籍新娘』新店 左岸文化出版。
- [2009] 『騷動流移』台北 台灣社會研究雜誌出版社。
- 夏曉鵬／陳信行／黃德北編 [2008] 『跨界流離——全球化下的移民與移工——』(上·下)台北 台灣社會研究雜誌出版社。
- 謝成忠 [1987] 『認同的污名——台灣原住民的族群變遷——』台北 自立晚報社。
- 行政院主計處 [2010] 『九十八年家庭收支調查報告』台北。
- 薛承泰 [2004] 「台灣地區貧窮女性化減少之探討——以1990年為例——」(『人口學刊』第29期 pp. 95-121)。
- [2008] 「台灣地區兒少貧窮——1991-2005年的趨勢研究——」(『臺灣社會學刊』第40期 pp. 89-130)。
- 顏國鉉 [2006] 『嫁來台灣——新興移民的婚姻故事——』汐止 新新聞文化事業。
- 張翰璧 [2007] 『東南亞女性移民與台灣客家社會』台北 中央研究院人文社會科學研究中心亞太區域研究專題中心。
- 章英華／林季平／劉千嘉 [2010] 「臺灣原住民的遷移及社會經濟地位之變遷與現況」(黃樹民／章英華編『台灣原住民政策變遷與社會發展』台北 中央研究院民族學研究所 pp. 51-120)。

< 英語文獻 >

- Ahern, Emily M., and Hill Gates, eds. [1981] *The Anthropology of Taiwanese Society*, Stanford: Stanford University Press.
- Copper, John F. [1996] *Taiwan: Nation-State or Province?* 2nd ed., Boulder: Westview Press.
- Hu, Tai-li [1989] "Ethnic Identity and Social Condition of Veteran-Mainlanders in Taiwan," *Revue Européenne des Sociences Sociales*, 27 (84), pp. 253-266.
- Lai, Tse-han, Ramon H. Myers, and Wei Wou [1991] *A Tragic Beginning: The Taiwan Uprising of February 28, 1947*, Stanford: Stanford University Press.
- Lan, Pei-Chia [2006] *Global Cinderellas: Migrant Domestic and Newly Rich Employers in Taiwan*, Durham: Duke University Press.
- Numazaki, Ichiro [1999] "The Real Community under Imagined States: The Social-

Economic Transformation and the Rise of the New Taiwan Consciousness in Contemporary Taiwan,” in Huang Shu-min and Hsu Cheng-kuang, eds., *Imagining China: Regional Division and National Unity*, Taipei: Institute of Ethnology, Academia Sinica, pp. 253–264.

Tzeng, Shih-jung [2009] *From Honto Jin to Bensheng Ren: The Origin and Development of Taiwanese National Consciousness*, Lanham: University Press of America.

Wang, Hong-Zen, and Ching-Ying Tien [2009] “Who Marries Vietnamese Bride? Masculinities and Cross-Border Marriages,” in Hong-Zen Wang and Hsin-Huang Michael Hsiao eds., *Cross-Border Marriages with Asian Characteristics*, Taipei: Center for Asia-Pacific Area Studies, Academia Sinica, pp. 13–37.